

NO.95.2006. 9.30.



第4回「 Chernobyl の 1 クロナ」 キャンペーン 始まる!

「 Chernobyl の人間たち」 基金代表 V · キリチャンスキイ
これは、「 Chernobyl の人間たち」 が行う第 4 回目のキャンペー
ンです。最初のキャンペーンは、「汚染地に住む人々を移
住させるため」 のものでした。その後に 2 度行われたキャンペー
ーンは、カタログハウス社の支援を得て実現しましたが、「ジ
ーミル州立小児病院の血液腫瘍センターに血漿成分分離器
を！」 という目的を掲げていました。これらのキャンペーンは、
すべて一定の反響を得ることができました。今回のキャンペー
ンは、 Chernobyl 救援・中部と共同で行う「ナロジチ支援プロジェクト」 の一部です。



ナロジチ地区は、ウクライナの各地域の中でも、最も大きな被害を受けたところです。その人口は、事故前
に比べて 3 分の 1 に減少しました。 86 ヶ村のうち、 40 村には人が住んでいません。地区予算のうち、自己
資金は 10% にすぎません。職場が不足しています。ウクライナの法律により、ナロジチ町の含まれる強制移
住区域では、新たな建築に国の予算を投資することができません。このような理由で、ナロジチ地区には支援
が必要なのです。山のように未解決の問題を抱えている我が国は、現時点では、ナロジチの問題を解決するこ
ともやはりできません。そのため、私たちは再度キャンペーンを行うことにしたのです。

このキャンペーンで集まった募金は、次のような課題の解決に用いられます。

- * 上水道が使えないようになった村々の水道修理工事（例えばセレツ村では、既に水道が使えるようになりました）
- * 地区の中心であるナロジチ町の上水道網改修と過濾装置交換（ここでの水は鉄分を多く含んでいます）
- * 薬理室を用いている診療所にガスを引く工事
- * 学校の建物の改修
- * 地区病院の自家癒房ボイラー室の整備 etc.

このキャンペーンは小議会の協賛を得、すべての市民と、他州の議員たちへアピールが採択されました。
しかし、率直に言えば、募金はまだそれほど多くありません。ですから、私たちは日本の皆さんにも、ナロジ
チ支援の呼びかけをさせていただきたいと思います。

〒466-0822 名古屋市昭和区東郷町 137 1-10

Chernobyl 救援・中部 代表：市原佳代

郵便番号： 00880-7-108610

TEL/FAX: 052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail : chchubu@mucbiglobe.ne.jp

ホームページ : <http://www.chernobyl-chubu.jp.org>

ミルクキャンペーンのお知らせです

(榎本恭子)

早いもので2006年もあと3ヶ月。年末恒例「ミルクキャンペーン」のシーズンです。「救援・中部」の財政事情もあって、今年より、皆さんから寄せただく寄付金のみが頼りとなっています。そのため、「ボレーシュ」では、今号と次号の2回連続で皆さんにお知らせをし、ご協力をお願いすることにしました。

さてここで、なぜミルクキャンペーンが続いているのか、おさらいをしてみましょう。20年前の4月26日、チェルノブイリ原発4号炉の事故により、大量の放射能が大気中にはら撒かれ、牛の飼料となる牧草も飲み水も、ひどく汚染されてしまいました。そして、粉ミルクとなるはずの牛乳もまた、放射性物質に汚染され、処分せざるを得なかったのです。

母乳ならどうかって？ 母乳からも放射性物質が検出されたのです。

半減期の長い放射能は、いまでも土地を水を汚染し続け、成長期にある子どもを持つ親を不安にしています。そのため「救援・中部」は、放射能に汚染されていないミルクを贈り続けているのです。

皇室では、41年ぶりの「男児誕生」で悲喜こもごもの日本ですが、チェルノブイリの被災者たちは事故以来20年、男女を問わず、体に異常が出ないことだけを願って、妊娠・出産を続けているのです。

ウクライナの赤ちゃんは、小さな手で顔を傷つけないように、蚕虫のように布でくるくる巻きにされて育てられます。ほんと、かわいいですよ。そんな子どもたちの未来を願って、皆さん、ミルクキャンペーンにご協力をお願いします。



そして！クリスマス・カードキャンペーンもお忘れなく

毎年、力作ぞろいのカードキャンペーンですが、どんなにつたなくても、はたまた芸術作品でも構いません。皆さんの被災者への想い、励ましの心が伝わればいいのです。皆さんに描いていただいたカードは、放射能の影響による重篤な病気で入院している子ども達や、孤児院の子ども達に贈られます。「救援・中部」の代表団が小児病院を訪ねると、子ども達のベッドに日本語で書かれたクリスマスカードが、大事そうに飾られているのを目にする。自分達の知らない遠い国の人たちからのカードは、彼らの宝物です。一枚でも多くのカードを贈りましょう。

【カードの作り方】

1. カードを作ります
2. カードを封筒に入れ、さらにひとまわり大きい封筒に入れ、事務局に送ってください。
3. カードは12月13日（水）必着です。

カードの送り先・問い合わせ先

〒466-0822
名古屋市昭和区東山町137 東山アパート1-10
テルノブイリ救援・中部
TEL・FAX 062-836-1073 (月水金 10:00~17:00)
E-mail chchubu@muc.biglobe.ne.jp

益田清風高校 文化祭便り

「チェルノブイリから20年」に取り組んで

1年F組 都竹良典

僕たち益田清風高校1年F組は、文化祭でチェルノブイリについての展示をし、最優秀賞をとることができました。その展示の内容は、「原発事故の内容」「放射能とは?」「被災者の状況」「もし日本で原発事故が起きたら」「日本の原発の状況」「チェルノブイリ支援の状況」「クリスマスカード作成」「募金活動」です。模型を作ったり、B紙にまとめたりして展示をしました。

僕がこの展示で学んだことは、「人類最悪の事故」と呼ばれたチェルノブイリ原発事故の恐ろしさです。

事故前と事故後の四号炉を再現した模型からは、爆発の威力を学びました。インターネットなどから調べたことをまとめたB紙からは、この事故での死者数などで驚いたし、今も放射能の影響で苦しんでいる人が沢山いると思って、放射能は恐ろしいと思いました。また、子どもの死者数も多く、甲状腺ガンになった子どもも多いことを知り、かわいそうだと思いました。僕は「もし日本で原発事故が起きたら」の模型を担当しましたが、作り上げた日本地図の模型からは、日本の原子力発電所がチェルノブイリ原発事故と全く同じ条件で事故を起こすと、相当な範囲に被害が及ぶことを知り、恐ろしいと思いました。日本だけではなく、世界の原子力発電所には、この事故の反省を生かし、二度とあのような事故を繰り返して欲しくないと思いました。

今なお、事故の後遺症に苦しんでいる被災者がいることも知りました。事故当時に子どもだった被災者から生まれた子どもに、先天性の障害があるなど、二十年という時が経ってからも、このような被害があることを知って、僕も胸が痛みます。事故当時、子どもだった被災者の多くが甲状腺ガンになり、手術しても大きな傷が残りました。大人になったその子ども達は今、どのような人生を歩んでいるのかは分かりませんが、これからも希望を持って生きて欲しいと思いました。そして、そのように苦しんだ子ども達がいたという事を考え、「チェルノブイリから20年」に取り組み学んだ原発事故の恐ろしさや被災者の状況、もし日本で原発事故が起きたらなど、これから自分の人生に生かせるものは生かしていきたいと思いました。また、被災者のことを考えて、被災者の方々にはこれからも希望を持って生きていって欲しいし、自分も健康な体を持っていることに喜びを感じて生きていきたいと思いました。

「募金活動」と「クリスマスカード作り」は、文化祭があった二日間で、沢山の人が協力してくれました。協力してくださった人々の思いやりは、本当に暖かく感じました。少しでも、それから被災者の支援に役立ってくれると、とても嬉しいです。

最後になりましたが、資料の提供や紹介など僕たち1Fの取り組みに協力していただき、「チェルノブイリ救援・中部」の皆さん、たいへんありがとうございました。これからも機会がありましたら、支援活動に協力していきたいと思います。

2006年度奨学生決定！

2006年度の新規奨学生は、9名に決定しました。医療短大(4名)、農業大(4名)、国立大/旧教育大(1名)です。(従って今年度は合計41名に奨学生が給付されます。)1999年に創設された「チャエルノブリ奨学基金」での奨学生採用は、今年度をもって終了します。尚、奨学生の供与は、4年制大学の奨学生が卒業する2009年まで行われます。1999年から2006年までの奨学生採用数は107名です。1000万円の寄付をベースに展開されたこの制度によって支えられた学生は、卒業後、汚染地マリーン、ナロジチ、コーラスティン、オブルチヤ、ジトーミルの医療施設・教育施設、また、農業企業体で働いています。

しかし、全てが必ずしも汚染地域に貢献しているとはいえず、これについてホステージ基金は憂慮しているようですが、チャエルノブリとしては若い人々を汚染地域に拘束することはできないので、その専門性を生かしウクライナのどこかで活躍してくれればよいのではないかと考えています。多くの病気や困難を抱える奨学生を支えたこの奨学金制度は、ウクライナの学生の経済的・精神的支援になったことを確信します。

(山盛)

今年度の奨学生選考はこれからですので、前年度の奨学生の作文を紹介します。

〈医科短大生ヤクーノ・リュドムィラ・オレクサンドリブナの文章〉

チャエルノブリの悲劇が私達の心の中で警鐘となって鳴り響いたのは、それほど以前のことではありません。その後19年の歳月が、黒い翼で私たちの傷ついた大地の上を飛び過ぎていきました。さらに数年が、数十年が過ぎていくでしょう。しかし、この悲劇の日付けは、変わることなく人々をおののかせることでしょう。その邪悪な翼の影におおわれた人々をも、尋めを受けた大地から遠く離れて生まれた人々をも。この日は常に、生きとし生けるものすべてを同一の苦しみと同一の希望で結びつけるでしょう。19年の間に、放射線のためにすでに何千人の人たちが、多くの子どもたちと成人男女が、様々な病気に冒され亡くなっています。

私は1987年6月19日に生まれました。事故から1年以上経っていましたが、それにもかかわらず。事故はあまりにもあからさまに私の健康に影響したのです。8歳になった時、私はとても恐ろしい、全治不可能な病気に罹りました。それはケトアシドーシスや低血糖症の傾向を持つ重度のインシュリン依存型糖尿病でした。私は常時インシュリン療法を行っています。この病気のために多くの人が亡くなっています。私もその可能性は免れません。この病気は他の器官にも非常に大きな影響を及ぼし、私はそのせいでとても苦しんでいます。発病の数年後、視力の問題が起きました。キエフ市の検査の後、白内障であることがわかりました。2001年、私は両眼の手術を受け、水晶体を摘出しました。しかし、手術後も視力は回復せず、糖尿病性網膜症が新たに発症しました。

そして、最近、糖尿病性神経障害、下肢の糖尿病性細小血管障害、慢性胃・十二指腸炎といった病気がさらに発見されました。これらすべての病気を克服していくことはとても難しく、特別の配慮と食品が必要です。

私達がチャエルノブリのために払った代償は巨大なものですし、私達はその代償を未だに支払い続けています。時の流れは速く、恐ろしい惨事の黒い日付は遠ざかっていますが、その思い出は長く残り続け、記憶を呼び覚まし続けていくことでしょう。

私は、私達の社会に無関心と無責任が存在しなければ、この悲劇は起こり得なかつたのではないかと思います。

8月5~6日、今年も伊那で合宿をしました。

夏期合宿に初めて参加して (池田光司)

小野寺さんの牛舎でゴクリと飲んだ牛乳、絞ったままの何も手を加えずに冷やされた牛乳、美味しかった。また、小牧さんの自家菜園でかじったトマトの味、力強かった。

食べ物の話から始まりましたが、今回、夏期合宿に参加して感じたのは、身近な自然の恵みでした。食べ物だけでなく、小野寺さんの所での牛糞を利用したバイオガスシステム、関さんが取り組むバイオディーゼル燃料製造システム、小牧さんの家の裏の水路で回る小型水力発電など、身近な自然を利用したエネルギー・システムも印象に残りました。

これらが、伊那の田・畑・山に囲まれた自然と溶け合って、心地良さを醸し出しているように感じられました。合宿1日目には、今後のチャレッジの活動の方向について、「菜の花プロジェクト」を中心に熱い意見交換がなされました。「このプロジェクトが、ナロジチの人々と身近な自然の恵みとの間に、良いサイクルが回りだすキッカケになったら、どんなに素晴らしいことだろう」…伊那の地を訪れて、その思いを強くしました。

また、合宿を通して、特に泊った山荘でのバーベキューを通して、スタッフの方々の活動への並々ならぬ熱意と努力を、肌で感じ取ることができました。今後、チャレッジの活動に一歩（半歩ぐらい）になるかもしれませんか？踏み込んで協力できたらと思います。

合宿で「先人の知恵」を学ぶ (檜垣 徹)

私たちの身の回りには、人工的に作られた不自然な物が溢れている。その中には、人間のある種の目的を達成するために、一時的に役に立つ物もあるかも知れないが、用が済めば単なるガラクタ、毒物である。それらは景観を害し、自然を損ない、人間を含めた種々の生物を傷つける。人工的に作られた放射能というものは、その不自然な物の最たる物と言って良いかも知れない。

そういう不自然な物が増え続けることに、時として暗澹たる思いとなる。たとえ、それらの増加を止めることができたとしても、既に生み出され存在している不自然な物を前にすれば、途方に暮れるしかない。しかし一方、自然の力を利用したり、物ができるだけ大事に循環的に利用するという、古くから存在するやり方を取り入れたりすることによって、少しでも不自然な物を減らすという知恵を人間は持っている。その一端を、チャレッジの会議や合宿で知らされ見せてもらって、途方に暮れながら、それでも何かしら心が浮き浮きするような、そんな気分を味わうことができている。合宿においても、関さんのバイオディーゼル、小野寺さんのバイオガス、小牧さんの水力発電を実

際に見学し、今までの「言葉による説明だけでは分からなかったこと」を感じ取ることができたように思う。バイオガスというのも、原さんによると、昔から先人たちが利用していたものだそうで、そういう先人の知恵を、様々な方面でもっと学びたいという気にもなった。こういったものが、自然を利用した「菜の花プロジェクト」の中で一体となって、良い方向へ進んで行ってくれることを期待している。



特集!! 9月訪問団帰国報告

出足順調 ナロジチに菜の花が咲いていました！

長野県南箕輪村 原 富男

9月5~14日までウクライナを訪問し、「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」の調査をしてきました。

訪問者は、日本から河田昌東・関浩行・原と、現地参加の戸村京子・宮藤吉郎・竹内高明（通訳）です。今回の訪問先は、ナロジチ地区行政・保健所・消防署・バイオディーゼル燃料（以下BDFと略す）工場予定地・農場予定地・共同研究のパートナーである農業大学などでした。

ナロジチ地区行政では、私達の「菜の花プロジェクト」を説明し、現地の意向をお聞きしました。行政としては、BDFと畜産飼料を得る為、1,000ha規模で菜の花の栽培を希望していく、当面100~200haから始めてはどうかと提案されましたが、こちらの目的は土壤浄化の実験（2~3年で充分）であり、小規模プランモデルであることを説明しました。

話し合いの後で、「菜の花栽培の候補地」と「BDF製造工場の予定地」を見学しました。菜の花栽培の候補地は、BDF製造工場予定地に隣接する畠で、とても広い農地でした。

BDF製造工場予定地は、ナロジチ町の飼料工場で、かつては地区内24のコルホーズの配合飼料を製造していた場所です。現在は生産量が減少しているため、大きな工場建物や倉庫が空いていて、BDF製造の為の建物やバイオガス製造用地としては、充分な広さがありました。工場自体の敷地面積は5ha、かつて使っていた経舎や従業員の耕作地も入れると、全体で15haもあるということです。飼料工場に、ウクライナ製のBDF製造装置の試作機が置かれています。この装置は、「バイオマス燃料製造者組合ナロジチ支部」が、キエフの工場から貢借しているもので、これまでにBDFを300kg試作し、キエフで試験中のことでした。この装置がそのまま使えばいいのですが、腐食が予想されるのにステンレス製ではなく鉄製であり、不安が残りました。日本から伊那製の装置を送る方が良いかもしれません。

飼料工場を後に、ウージュリ川に行く途中の道路の両側、帯状に「からし菜」（なたねの仲間）の花が咲いていました。慌てて車を止めてちらり写真を撮りました。河田さんは、この花を見るまで「寒いナロジチで本当に菜の花を栽培できるのか？」と不安だったとのこと…。私たちの数年後の夢である「一面の菜の花畠の景色」を先取りするかのようで、一同大喜びでした。

ジトーミルに戻り、農業大学の学長はじめ教授の皆さんと会見しました。大学側は、土壤浄化・BDF・バイオガスのいずれについても協力できるとのこと。栽培管理・放射能測定・人材・農業機械借り入れなど、諸問題が解決されそうです。とりわけ、栽培に携わる人（労働力）の問題は悩みの種だったので大助かりで、農業大学の事業への理解の深さと关心の高さには、驚くばかりでした。

会見の後、大学の放射能測定室と付属植物園を、見学させていただきました。

【非常事態省ジトーミル支部医療センター】

慈善団体「セルノブイリの消防士たち基金」代表のチュマクさんの案内で、新設された医療センターを見学しました。休日を返上して消防士達が手作りした内装はとてもきれいで、所長の内科医ガリーナさんは、携帯用心電計を宝物のように大事にしていて、「これで出張診療もできるようになった」と、とても喜んでいました。他に内視鏡もあり、外務省の草の根支援で



〈からし菜畠〉



〈ガリーナさんと心電計〉

予定されている超音波診断装置が入れば、完璧な医療センターになります。

【セレツ村】 「中部よつ葉会」のバザー収益金などにより進められている「セレツ村の水道工事」は、工事途中ながらも一部で水道が使えるようになっており、村議会議長のマリヤさんは大いに感謝していました。 *紙面の都合で多くをここに書けません。

詳しくは、「訪問団報告書(25頁)」がありますので、事務局までご請求ください。

ナロジチ菜の花プロジェクト・事前調査訪問団報告

特定非営利活動法人 伊那谷菜の花楽舎 関 浩行

今回の「ナロジチ菜の花プロジェクト」の中で、BDFの取り組みが計画されているという縁があり、「チュルノブイリ救援・中部」の皆さんと知り合い、ウクライナ訪問團に加わる事ができました。

ここで繰り返しあ伝えする必要はないと思いますが、今回の訪問で一番感じたことは、15年以上にわたる活動の幅広さと、現地の人たちとの信頼関係の強さでした。特にナロジチでの初日、行政庁で行なわれた懇談では、冒頭に、これまでの水道施設支援などに対して、同行した原氏への「名誉区民賞」の授与があり、初めてのナロジチを、とても近く感じることができました。

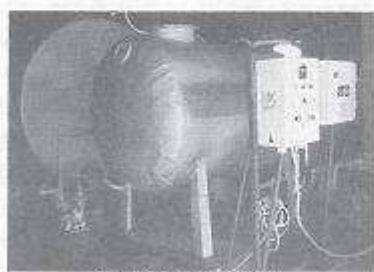
BDFの取り組みに関しては、その懇談の際、「2006年の春から、当地でも既に試験的に製造を始めていた」との話があり、ウクライナでの試験製造というのではなく、もしも私たちが行なっている規模より大きいのではないか…との想いが頭の片隅をよぎりました。案の定、翌日案内していただいた古い肥料工場の中にあるBDF製造施設は、1時間当たり1tの製造能力があるという。500tはあろうかという原料タンクと、その倍以上の製造タンク。2つのタンクが横向きに置かれてラインで繋がっているだけの単純な構造で、「連続製造ができるのだろうか、製造工程はどうなっているのか?」など、詳しい事を聞きたかったのですが、残念な事に時間がなく、次の場所へと移動になってしまいました。

私たちの製造施設は、日量約145t。連続製造ではなく1回ごとに定量を反応させる方式で、いわばこれが一般的なBDFの製造方法。「ひょっとしたら、BDF先進地のドイツに近いウクライナでは、新方式を取り入れているのか?」とも思いましたが、装置を見る限り大雑把な造りで、とても最新鋭とは思えず、説明していただいた作業員の方も、詳しい事は分からぬ様子でした。

振り返って推測するに、「製造能力時間当たり1t」というのは、単にポンプの移送能力のことではないかと思われます。今回の訪問で、団長の河田さんからの提案を受けてまとめた、ナタネの栽培実数面積は4ha、そこから採れる油の量は多くても7,000t。私たちが今使っている装置でも、2ヶ月もあれば処理できます。残りは、周辺地域で栽培されたナタネを買い取って榨油する事になりますが、まずはそうした時の原価計算をしなければなりません。現地では、「国レベルでもBDFの開発計画がある」という話でしたが、具体的ではなく、行き先は不透明ということでした。原価計算の結果、事業としての見通しが立たなければ1,000万円はあるであろう装置の設備という訳にはいきませんし、4haからの収量に見合うだけの小規模設備では、なおさら投資効率は悪くなります。そのへんの判断をした上でのBDFへの取り組みですが、大きな時代の変化を見通せば、必然のことだと確信しています。



＜再び水が出るようになりました(セレツ村)＞



＜鉄製のBDF製造装置＞

(2: 放射能は何処へ)

放射能を人工的に分解することは出来ない。所詮は、半減期にしたがい次第に減っていくのを待つしかない。セシウム 137 の半減期は約 30 年、300 年後にやっと 1000 分の 1 になる。では、菜種に吸収された放射能はどうするのか。(菜の花プロジェクトのイメージ図は、次ページを参照)

● 放射能はバイオガス発酵で濃縮

菜種に吸収されたセシウムやストロンチウムなどの放射能は、菜種油には溶け込みず、油を絞ったあとの油粕や、穂物の大半をしめる茎や葉、根に残る。これは、水溶性になって土壤から植物に吸収されたセシウムなどが、油に溶けないためである。そこで放射能を含む植物体の、いわゆる「バイオマス」をどうするかが問題である。我々は、バイオマスをメタン発酵させ、バイオガス・エネルギーを生産する。動植物などの、炭素と水素を含む有機物を無酸素状態に保つと、メタン菌の働きで分解し、メタンガスになる。汚染で腐った都市の河川などから、ふくふくと噴出す泡がメタンガスである。これを人工的に行う。このようなバイオガス技術は、近年、畜産廃棄物の処分などに利用されることが多く、発生したガスを使ったディーゼルエンジンによる発電や、ボイラーの熱源などに利用されている。長野県の伊那市では、われわれの仲間が牛の糞でバイオガスを作り、ボイラーや家庭用熱源に使って、すでに 10 年の実績がある。北海道などでは、畜産廃棄物による大規模なバイオガス発電が試みられているが、日本ではまだまだ普及が遅れている。

● バイオガスもドイツが先進国

切尔ノブリ原発事故で脱原発を目指したドイツは、風力を始めとするさまざまな形の持続可能エネルギーの開発に取り組んでいる。2004 年に生産されたバイオガスは、石油換算 129 万トンに及び、ゴミ焼却炉発電や、下水汚泥によるバイオガス、森林廃棄物によるバイオガスなどの利用による。2003 年度のバイオマス発電は、51 百㎾時、同国の総発電量の 1.2% を占める。ウクライナも、森林廃棄物を始めとして、バイオマスには事欠かない

国である。我々の、ナタネによるバイオガス生産が、ウクライナにおける新たなエネルギー・モデルとなるよう願っている。

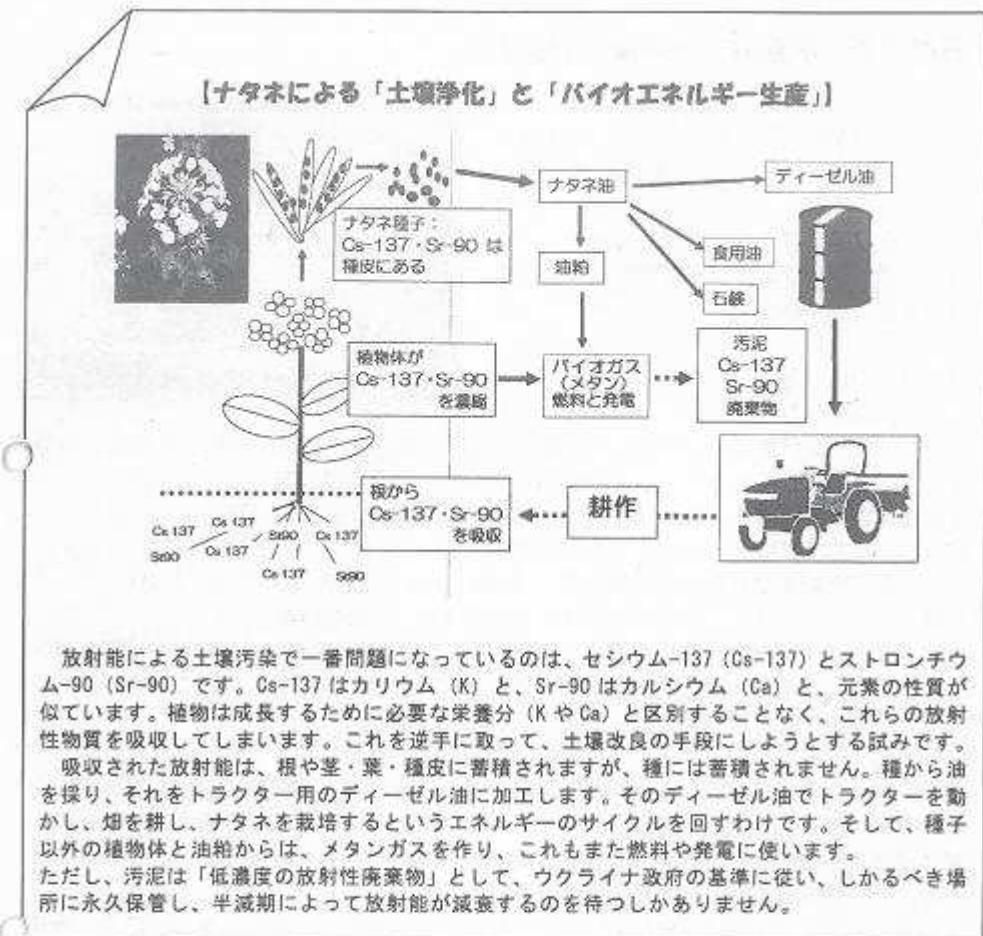
● 最後は低レベル放射性廃棄物として処分

放射能を濃縮したナタネのバイオマスから、ディーゼル油とバイオガスを取った後の残渣は、放射能を濃縮した汚泥となる。これは、低レベル放射性廃棄物として処分する。ナタネによる土壤浄化とディーゼル油とバイオガス生産を有機的に結びつけ、1 つのシステムとして機能させるのが、「ナロジチ再生・菜種プロジェクト」である。これは、広範囲の畑から、ナタネを通じてセシウム 137 を吸収して集め、最後は濃縮された汚泥として処分する放射能対策である。勿論、この汚泥はウクライナ政府の基準に従い、しかるべき場所に永久保管し、半減期によって放射能が減衰するのを待つしかない。

● ナロジチにナタネが咲いていた！

今回のウクライナ訪問の大きな収穫は、ナロジチで、開闢のナタネを発見したことである。正確には、西洋カラシナというナタネの仲間で、学名を *Brassica juncea* という。日本では各地の河川敷で春咲くが、寒いウクライナでは秋咲きらしい。これで、ナロジチでのナタネ栽培に大きな障害はなくなった。栽培には、国立ジトーミル農業生態学大学の専門家が協力する。さらに、ナロジチ町には、今はあまり利用されなくなった家畜の配合飼料工場があり、ナロジチ地区行政の協力で、ここにバイオディーゼル・プラントと、バイオガス・プラントの建設が可能となった。いつの日か、青空の下に広がる黄色いナタネ畑が、汚染地域ナロジチの人々に希望の火となるよう頑張りたい。皆さんのお手伝いを！

(河田)



放射能による土壤汚染で一番問題になっているのは、セシウム-137 (Cs-137) とストロンチウム-90 (Sr-90) です。Cs-137はカリウム (K) と、Sr-90はカルシウム (Ca) と、元素の性質が似ています。植物は成長するために必要な栄養分 (K や Ca) と区別することなく、これらの放射性物質を吸収してしまいます。これを逆手に取って、土壌改良の手段にしようとする試みです。

吸収された放射能は、根や茎・葉・種皮に蓄積されますが、種には蓄積されません。種から油を探り、それをトラクター用のディーゼル油に加工します。そのディーゼル油でトラクターを動かし、畑を耕し、ナタネを栽培するというエネルギーのサイクルを回すわけです。そして、種子以外の植物体と油粕からは、メタンガスを作り、これもまた燃料や発電に使います。

ただし、汚泥は「低濃度の放射性廃棄物」として、ウクライナ政府の基準に従い、しかるべき場所に永久保管し、半減期によって放射能が減衰するのを待つしかありません。

なごや国際センター「ウクライナ・フェスティバル」に参加しました。

7月29日～30日に、なごや国際センターで開催された「ウクライナ・フェスティバル」に、「チェルノブイリ救援・中部」からは、ウクライナ料理の「ボルシチ」を販売しました。フェスティバルの前日、大きなお鍋2釜に、200人分のボルシチを煮込みました。貰い出しから手伝ってくださったボランティアの島田さん達も一緒にになって、国際センターの料理室は、にぎやかな声と美味しい香りにおいでいっぱいになりました。フェスティバルの一日目は、ボルシチを温め、味をととのえ、後はお客様を待つばかりです。色々なイベントを見て立ち寄ってくださる人、ボルシチを自指して来てくださる人で、一日目の予定数は大好評のうちに終わってしまいました。そして二日目も、スタッフのお腹に入らないまま（余分に作ったボルシチまでも）、みなさんに召し上がっていただきました。「本場ウクライナのボルシチよりも美味しいかった」（!？）とか、二日間とも食べに来てくださいました。ありがとうございました。（大谷早苗）

日進市で「平和展」が開催されました！

「コスモス日進」は、日進市の後援を受けて、去る8月5日から9日まで、日進市にぎわい交流館で「平和展」を開催しました。

私たちの活動は1984年に始まり、写真集「ヒロシマの記録」を世界各地へ送り、その歴史を風化させず、恒久平和を願うというものが、近年は会員数も減り、続けていくんだろうかという不安と、やらなくてはとう躇躊躇との繰り返しの日々です。

さて、2000年に写真展と言う形で始まった「平和展」も、日進市の「戦争と平和展」への参加者を含めると、今年で6回目となります。その度に思うことは、このような地味な催しに目を向けてもらうことの難しさと、少人数ゆえの大変さです。今年は、チェルノブイリ被曝20年という節目の年にあたり、以前より、微力ながら「チェルノブイリ救援・中部」を支援してきたものとして、「何かしたい」という声が上がりました。そこで、「救援・中部」からパネル写真をお借りして、「平和展」にチェルノブイリコーナーを作り、展示することになりました。

5日間の延べ来場者はおよそ200名で、昨年の市主催の時と比べると4分の1以下でした。ただ、昨年は小学生の団体来場があったので単純比較はできないのですが、それでも、中高生など若い人にもっと来て欲しかったと思います。

チェルノブイリのコーナーでは、原発の恐ろしさ、それが日本で起こったらという現実感が交錯し、眞剣に見ている人々が印象的でした。それは、原爆のことが、被害者や関係者を除いてほとんど過去のことになりかけていて、まさに歴史を学ぶ感があるのに對し、原発は日本各地にあり、チェルノブイリの悲劇は私たちの日常と密接に結びついていることを、改めて認識することでもあるからかも知れません。

反省会では、チェルノブイリのコーナーについて写真を出すなら、もっと広島・長崎の核の被害者の比較（広島型原爆の約500発分の放射能が放出されたこと、ほとんどの被害は大気中や土壤・河川から出た放射性物質を体内に取り込んでしまったことによる内部被曝であった事など）を、パネル化して出した方が良かったのではないか、また「救援・中部」の活動内容を、もう少し詳しく知らせた方が良かったという意見も出ました。

終わってみると、この平和展でチェルノブイリ（救援・中部）の思いをどこまで伝えることができたのか、心もとないですが、改めて貴重なパネル写真をお借りできること、チェルノブイリ原発について、再び学ぶ機会を得たことを感謝いたします。ありがとうございました。

（コスモス日進：板倉清子）



ウクライナ留学日記

…秋／新学期編（戸村 京子）

＜ポーランドの旅＞

キエフ大学・夏休みの一時帰国中は、暑い中、京都の大院でのゼミ通い、名古屋ではボレーシュ編集、外務省のNGOセミナー参加、また自宅では積もっていた家事などで、忙しい毎日を過ごしました。その忙しさから逃れるように、7月末、ポーランドに降り立ちました。キエフからの若い友人とワルシャワで落ち合い、キエフ大で一緒にいた学生たちと再会したり、ポーランド各地を旅してから、陸路ウクライナに戻ることにしていました。



この旅のテーマは、「戦争をいかに後世に伝えているかを見る」。古都クラコフの近くにある元ナチスのアウシュヴィツ収容所1号オシフィエンチム、アウシュヴィツ収容所2号ビルケナウーフェジンカ、さらに規模の大きいポーランド東部のマイダネク収容所を見学しました。その巨大な「ナチスの殺人工場」の跡地が博物館として公開され、命を奪われた膨大な数の人々の、生きていた証である当時の品々が展示されていました。アウシュヴィツほど知らないマイダネク収容所では、広大な敷地に残るバラ

ックは家畜小屋の様相で、草原を渡る風が有刺鉄線に鳴っていました。

また、ワルシャワなどポーランドの多くの街は、第二次世界大戦時に破壊し尽くされ、人びとが写真などを元に、見事に戦前の街並みおりに復興させた記録写真・映像もありました。

しかし、ポーランドには、世界遺産の中世の町や城も残されています。北の港町グダンスクの、いくつものくすんだレンガの教会は、長い年月を経た風格を感じさせます。この他にも、各地の教会でコンサートがあり、オリーヴァ教会のバイブルオルガンの奥深い音色は、心に残るものでした。ショパンのCDも、お土産に買いました。

＜キエフ大学－新学期＞

ウクライナの新学期は9月1日で、小学校などの新入生も、花束に真新しいスーツやかばんで、皆「ピッカピカ」です。大学も学生があふれるほどで、各国から新しい留学生もたくさん来ています。寮にも、新人が戸惑いながら手続きをしていたりして、少し古株の私たちは、どんな学生が来たかと興味津々です。



授業のクラス分け（今学期も私の場合、そもそもウクライナ語のクラスが成立するかどうかが問題）や、新しい担当の先生は誰かとなるところ、私はチエル教の9月訪問団と合流し、ジトーミルへ出かけました。ナロジチ地区での「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」の調査・打ち合わせのためですが、これについては他ページ（p6～7の特集）で報告されているので省略します。

さて、私の留学生活・第2章は、これから始まりです。

事務局便り

暑い夏も終わり、毎日秋めいて参りました。窓を通してさわやかな秋風を感じながら、蚊取り線香の出番もやがて…。そんな事務所にも早々と、手作りのすてきな和紙で作られたクリスマスカードや、しおり・折鶴・兜。また、文化祭の取り組みで、生徒さん達が作成したクリスマスカードや、折り紙で作る作品のお申し出など、ひとつひとつ想いを込めて作ってくださる皆様のお気持ちが、事務局にあられます。そして、郵送でのご寄付、郵便振替を通して皆様からのご寄付やメッセージ、いつもながら、本当にありがとうございます！ あらためて感謝の意でいっぱいです。確実に、被災の方々にお届けし、救援に役立たせていただきます。

さて、9月末は今年度上期の中間決算になります。7月に弥生会計のソフトを活用するべく、NPOの会計アドバイザーの方にサポートしていただき、事業所データを作成しました。初期設定の段階で、「既存のソフトでは部門会計ができない」ということで、新しい弥生会計のソフトを導入しました(ソフトは無料)。当上期は、従来のエクセルと並行して、会計処理を行っています。色々と問題にぶつかりながら、中間決算に向けて奮闘中？です。次号でご報告できると思います。（続）

あなたは、もうボーリングを探しましたか？

- *ペンタゴンにボーリング757型機は突っ込んでいない？
- *世界貿易センタービルの崩壊には爆薬が使われた？
- *テロ突入犯人は、今も生きている？
- *テロを事前に知っていた人達がいる？
- *ユナイテッド93便から携帯電話は繋がらない？



以下の本（DVD）で、あなたの頭脳を確かめてみましょう。

「暴かれた9.11疑惑の真相」／ベンジャミン・フルフォード著（扶桑社）
「911ボーリングを探せ（DVDとその解説書）」／インターネットHP www.wa3w.com/911/

編集後記

- ☆パソコンのせいでドライアイ気味。解消策は湯気。炊きたての炊飯器の蓋をあけて顔をつっこむ。電気ポットの蓋をあけて顔をつっこむ。その姿は誰にも見られたくない。（佳）
- ☆某団体の代表をしている若い人が、体調不良を主訴に受診した。イベントを前に準備が整らず、焦りと責任感とで精神的に疲れたとのこと。事業内容がマンパワーに比べ、盛りだくさんで本来の仕事にも支障が出ているとのこと。私たちはマンパワーに合った事業内容をしているよね。（美）
- ☆「テロ」とは、フランス革命の際に、反政府派の市民を虐殺した「独裁政権」につけられた言葉であり、本来は「国家による市民の人権弾圧」を指す。米国の支配者達は今、自分達の利益を膏かす人々を「テロリスト」と呼び捨てているが、実は、彼等こそが一般市民を欺く「テロリスト」と呼ばれるべきである。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷 「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473